
Fate/parallel

如月双

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/parallel

【Nコード】

N1611BA

【作者名】

如月双

【あらすじ】

原作とは異なる場所、人物で行われる聖杯戦争を描いたものです。

はじめりの日（前書き）

はじめまして、如月 双と申します。

何から何まで拙い作品ですので、生温かい目で見てください。

はじまりの日

夢を見た。

その風景には何もなかった。

時代から切り離されたかのように、構造物は見る影もなかつただそこに
あるだけ。

そこで何があつたのだろうか。

これはどこかの戦場の跡だろうか。

歴史の教科書でしか戦争を知らない彼女にとって、この風景は推測の域をでない。

乗り物が急加速するように視界が狭まり一人の男に焦点が定められる。

人々に一人の男を囲み、感謝しているのだろう。

助けてくれてありがとう、と。

しかし、彼の表情は暗い。絶望の色と言っても良い。

人々は彼のそんな表情かおを見ていない。

そんなことは彼らにとっては切り捨てても良かったのだ。自身が助かったのだから。

そして、あくまで儀礼的に感謝を述べ、敬っているに過ぎない。

「……………」

少しずつほとぼりが冷めていくと彼の元から離れていく。

彼はただ、彼らを危機から救ったに過ぎない。

遠くを見つめる、その瞳は何を見ているのか。
その瞳はどこまでも透明でどこまでも澄んでいた。
むしろそれが、怖い。それは人の瞳ではない。

ただ、眺めているのか。
何も、見ていないのか。
次の、戦場を見ているのか。

世界が暗転した。

視界が開けば、聞こえたのは慟哭。

「告げる」

日付の変わる時間、彼は自分の部屋に無駄に凝った幾何学の模様が描かれている。

その中心に彼は立ち、右手を前に突き出していた。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に」

集中。精神を研ぎ澄ませる。

「聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

陣が回転し始め、世界自分の常識がずれていく。

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者」

唱え始めて気付く。何が出るかな何が出るかな、と。

別の場所で行ったとされる聖杯戦争の方法を真似たこの聖杯戦争。英霊と縁のある聖遺物なんて持っていない。

ただ召喚出来さえすれば、自分は勝てるそう思い込んでいた。

「汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ!!!」

閃光、暴風、電撃。それらが、部屋を渦巻き、余波で私物を破壊していく。

「嘘だろ...」

眩いたところでもう遅い。それらが収まった時には、見るも無残な姿に形を変えていた。

「これから、どこで寝りゃいいんだよー!!」

さて、怒りの矛先をどこへ向けて良いのやら。

まったくまったく。父さんったら!!

少女は父の浪費癖に頭を悩ませながら、飛行機を降りていた。

初めての日本。

祖母が日本人なのである程度イメージは出来ていたが、見てみるとやはり違うと思う。

しかし、未だ空港にいる為、さほど変わりばえしないにもかかわらずそんな風に思ってしまう。

これも初めての海外だからだろうか。

いま、一番の問題はお金だ。

どこぞの宝石魔術師みたいなことを思うが、彼女にとっては死活問題であった。

なにせ父が浪費家なのだ。おかげで月に何日かは空腹で過ごすことも珍しくない。それでも借金だけはないのが不思議でしょうがない。それはさておき。

「まずは住む場所とお金ね」

祖母から無理を言って借りたお金は飛行機代でほとんど消し飛んだ。あとは数日分の路銀のみ。

もしかしたら、今回の聖杯戦争の行われる水面市までの交通費で路銀は消えてしまいかもしれない。

「働くにしても…」

空港のロビーの窓ガラスに映る自分の姿を見て、改めてため息が漏れる。

スラリとした体型。手足は細長く、整っている。

ただし、低身長故に未だに小学生に間違われる。

化粧をすれば少しは変わるかもしれないと思ったりもするが、それを買うお金がない。

堂々巡りだ。

「取りあえず移動しましょ」

頭を切り替え、空港直属の駅まで進み、切符を買う。

ホームに降り、停車していた電車に乗り込み、椅子に座る。

電車で揺られること約2時間。ようやく水面市に彼女は降り立った。

これからどうしようか。残念ながら知り合いはいない。祖母のツテも水面の地にはない。

どこかの家で暗示をかけても良いが、教会に頼るのもなんだか癪だ。

しばらく立ちつくしていると、デニムにワイシャツインの小太り

の男が近寄って来た。

ハッキリ言って気持ち悪い。なんだか、息も荒い。

背筋が凍るとはこういう事を言うのだろうか。これは危険だ。

「set up」

壁面のスイッチをオンにするイメージ。それだけで彼女は変わる。右腕の魔術刻印の式に魔力を通し、身体能力を強化する。荷物を抱え走り出す。行き先はしょうがないので水面教会へ。

「あ、水面教会ってどこだっけ？」

「告げる」

槍を手に持ち男は静かに召喚の言葉を告げる。

先ほどまで槍を玩具みたいに振り回し、僕カッターみたいな行動を起こしていた人物とは思えない程集中している。振り回すのをやめたのは単純に振り回すのに疲れただけである。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。」

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。
誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、
我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

淡々と無表情にこなすその姿はまるでロボットのようだが、今は
真剣にやっているに過ぎない。

「成功…かな？」

「召喚なんて楽勝だよ」

そう家族に見栄を張ったは良いものの彼は内心焦っていた。
所詮は知識だけ。才能なんてない。

徐々に衰退していく真霧家の魔術師の後継ぎとしてなんとしても
聖杯を持ち帰らなければならない。

陣を地面に描く為地下室の掃除をし、単純な陣を書いて召喚に臨
む。

タロットカードを手に男は、召喚の詠唱を始める。

アルカナは正位置の吊るされた男。

それは先ほど陣を描いている時に見つけたタロットカードの一番上にあつたもの。

手に持っているのは大それた意味はない。着実というその意味の一つに願掛けしているようなものだ。

「なんでも良いから召喚されてくれ」

もはや、詠唱もへったくりもない。しかし、一応は令呪がある以上召喚はされるだろう。

「はあ…」

なんで君は出雲なの。悲劇のセリフが頭の中で繰り返される。

想い人であるその人物は彼女の斜め前。いつまでも眺めていたい。しかし、右手首にある三画の模様が現実を見せ付ける。

「なんでわたしが…」

決まりそして決めたことではあるが、普通に学園に通い授業中に

想い人を眺めていると、そのことを忘れてしまいそうになる。

「どうかした、楓？」

いつの間にか彼女の顔を覗き込むように笠原 出雲の顔が目の前にある。

いつ見ても綺麗な黒曜石のような瞳に吸い込まれそうになる。

「!?!」

目を起点に整った顔立ちを眺めているうちに我に返り、急いで飛び退く。

心臓の拍動が激しい。目の前の人物に音が聞こえそうで怖い。

「ち、ちよつと考えごとを、ね…」

出雲と聖杯戦争のことは口が裂けても言えない。

出雲を巻き込むわけにはいけない。

何も知らない一般人を、それも自分の知り合いであるなら尚更だ。

だから。

出雲を守る為なら己の手を血で汚すことは構わない。

それが彼女の決心。

「何か悩みがあるなら相談に乗るから」

いつもと同じ笑顔で出雲は笑う。

それは彼女にとって暖かい陽だまりに感じられる。

「ええ、その時は宜しくね」

偽りの笑顔、それに出雲は気付かない。それでいい。
気付く必要なんてない。

「アサシン」

音もなく彼女の目の前に現れる丈の短い和服姿のサーヴァントが
膝を付き頭を垂れている。

「何用ですか、マスター」

「他のマスターの割り出しは何処まで済んでいるの？」

「確認していないのはキャスターとランサー、そしてバーサーカー
のマスターです」

分かっているのは半分。

「とにかく、早めに割り出し急いでね」

「了解しました」

家に帰り、道場で汗を流してから嫌な予感が彼女の中をぐるぐる
と駆け巡っていた。

首を振り、自分にとっての最悪の状況を破棄する。そうでもしないと彼女の精神は押しつぶされそうだった。

「何なの、今の夢……」

目が覚めると自分は肩で息している。どつやらつなされていたようだ。

薄い水色のカーテンからは光の梯子が掛けられており、天国からの迎えが来たかのような錯覚さえ覚える。

寝巻が冷たい。寝汗で濡れたからである。今思えば、喉がカラカラに渴いている。

右手の鈍痛。反射的に左手で痛みの発症元である甲を抑える。

それが収まると三画の赤い模様が浮かんでいた。

「何、これ？」

父と母の残した蔵書の中身を思い出そうともこんな記述はなかった気がする。

もしかしたら忘れている、もしくは、まだ読んでいないのどちらかである。

寒い。寝る前に暖房を切っているので朝方の部屋はとても寒い。
このままでいれば確実に風邪をひいてしまう。両親の遺産で暮らしているとは言え、無駄遣いは出来ない。風邪をひけば診断費と薬代が掛る。

暖かいシャワーで汗を流し、彼女は朝食の支度を始めた。

夜、彼女は隣町のスーパーマーケットで戦利品特売品を手に入れて、帰宅しようとする、屋根から屋根を跳ぶ何かを捉えた。あれは魔術同師と別の何かであるとすぐに理解し、電信柱の陰に身を寄せた。

平行して跳ぶ何かに興味がわくが本能が警報を鳴らす。あれは係わってはいけない、と。

唾を無意識に飲み込む。もう行ったかと陰から顔を出すと、その異形と目が合う。

「Access」

無駄だと分かっているでも逃げる算段を作る。歯車同士が噛み合い回り出す。

己自身を変化させるスイッチ。

異形は目を細めじっとしている。寄り添う従者はその様子に疑問を抱き、

「どうしたの、アサシン？」

その声に思わず足が止まる。
なんで、そんな異形の側にいられるの。
なんで、そんな異形の側にいるの。

「そこに一般人、いえ、魔術師が」

「嘘…」

その人影に彼女は見えがある。否、見間違えるはずがない。
アサシンと楓に挟まれた出雲は逃げるといふ選択肢が失われたこ
とに気付き唇を噛む。

目の前の女の姿をした何かからは逃げられない。

と、言うより、首筋に腰に帯びられた二つの刀が当てられている
気がして一歩も動けない。

「どっして…」

友人だと、親友だと思っていたのは自分だけだったのか。

認めたくないが、認めるしかないのか。

それでも戦いたくない。例え、仮初の友情であっても自分の気持
ちに嘘は付きたくない。

だからこそ、逃げる。

「^{閃光}
Glint」

彼女を中心に閃光が撒き散らされる。茫然と立ち尽くしているで
あろう楓はその光を、アサシンは油断からそれぞれ浴びてしまう。
目眩ましが利くということとは、ある程度人体構造が同じだと判断し、

楓の方向へ駆けだす。待つてと声が聞こえたが、今は話を聞く余裕は出雲にはない。

家は彼女も知っている。では何処にと言われると逃げる方向がない。自分の行動パターンが少ないことに思わずため息が漏れる。

「Enhanced」
強化

急加速により視界が狭まる。先ほどの彼女たちのように屋根に飛び乗り、住宅地を駆け回る。

後ろから待つて、と声を掛けられているような気がするが、自分の命が大事だ。

もしかしたら殺されるかもしれない。それだけで、怖い。

確証のない、「かもしれない」の段階で人は行動してしまう。大抵は悪い方向に。

「!?!」

体を右に捻ったのはただの偶然。ただ悪い予感がしたからというものであった。

しかし、それでも。

鋭い風切り音が自分のすぐ右側を通り過ぎる。捻らなかつたならば、肩口からバツサリと右腕が地面に落下していたことだろう。だが、高速移動中にわざとバランスを崩すような動きをした為、出雲は屋根《地面》をキチンと蹴れず足を滑らせ瓦の上を転がり、地面に落ちる。

地面に落ちても勢いは止まらず、コンクリートレンガの塀にぶつ

かりようやく停止する。

全身が殴られたように悲鳴を上げている。肺から空気がほとんど逃げていき、息を吸い込もうと躍起になっても痛みからなのか吸っている感じがしない。

「ここは…」

僅かに揺れる視界を我慢して体を起こすと、目の前には先ほどの和服の女性。

「どうやら、お化け屋敷のようですね」

お化け屋敷。ここ水面市で若者に流行っている怪談スポットらしい。

血文字で魔法陣が描かれているとか、ここに迷い込んだものは血液を全て抜かれて翌日近くのゴミ置き場に放置されるとか、そして目の前にあるのに入れないという不可思議極まりないと有名なのだ。

呼吸を落ち着かせ、次の手を考える。

何も浮かばない。

「逃げないで下さい。マスターが時期に来ますから」

腰の脇差を抜き投擲。脇下の布地を貫通し後ろの扉に縫いつけるようにそれは刺さる。

下手に動けば、刃が脇下を切り裂く。そこには動脈がある。

目の前の人物の言うことは本当なのか。

もしかしたら、^{マスター}楓はやって来ずにここで彼女を殺すのではないか。腰の刀はまだ抜かれてない。右手は動かせる。

「動けば、心苦しいですが痛い目にあってもらいますよ」

女性の目は冗談を言っているようには見えない。しかし、逃げるなど言われて逃げない人物はいるのだろうか。この状況を打破するなにかが欲しい。楓の話は出雲自身がキチンと聞ける自信はない。むしろ、混乱したまま彼女を傷つけてしまう。それだけは嫌だった。

タイムリミットはすぐそこ。実力は歴然。出雲にとって最悪の状況でしかない。

逃げに徹しても追い付かれた。最後の手段は助けを呼ぶ。

しかし、助けを呼んだところで無駄だと思えば告げる。

恐らく誰かが叫びに気付きこの場所に入って来れたところで彼女は殺されているだろう。

だが、口にせずにはいられない。

「助けて」

声に出せた大きさは、蚊の鳴くような小さなもの。それでは誰にも届かない。

緊張していたのか、それとも逃げられないと頭が理解していたからか。

しかし、

二人の前に突如、暴風が吹き荒れ、稲光が走る。

ダメ…

ようやく追いついた楓が屋根の上で呟く。

これでは、意味がない。

これでは、自分の日常が守れない。

「ダメ　　！！！！」

無駄だと思っても叫ばずにはいられない。

何が起きてるの？

いまいち状況が理解出来ない出雲はただ茫然と目の前の現象を眺めている。

暴風は徐々に収まっていくと、そこには、和装と洋装を組み合わせたような格好の男が立っていた。

「サーヴァント　キャスト。召喚に応じ参上した。さて、貴女が私のマスターか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1611ba/>

Fate/parallel

2012年1月4日01時50分発行